

第二期刊行の意義

東洋大学では創立四〇周年に『円了全集』、七〇周年に『著作選集』の出版が公表され、八〇周年には『井上円了全集』刊行が討議されたが、企画だけに終わって出版されなかった。ところで、今回は「東洋大学創立一〇〇周年記念事業委員会」が設置され、その中の「記念論文集編纂委員会」は、四度目の『井上円了選集』刊行を決定した。それは「全集を前提とする選集」で、全一〇巻のうちの三巻を記念事業の出版物とし配布することと決定し、「第一部会」が編集・刊行を担当し、「哲学・宗教」に関する主要著作（単行本）を、親しみやすいように現代表記に改め、一巻毎に解説を付して出版した。第一部会はこの他に、『井上円了の教育理念』（新書版）を刊行してその責任を果たし、記念事業の終了と同時に、現在の「井上円了選集編集等委員会」に発展的解消をした。この委員会は、恒常的な研究機関（「井上円了記念学術センター」、本年四月設立予定）までの間の継続刊行等を行う臨時の委員会である。

今回の第二期の刊行では、第四巻は主著の『仏教活論』の続編、第五巻は仏教思想と哲学、第六巻は日本仏教、第七巻は仏教と哲学に関する諸問題と、仏教分野を四冊にまとめた。この中で『外道哲学』は専門書として研究の上で別冊とする、『仏教心理学』は心理学分野にいれるという理由で除き、以上の二冊以外の主要著書は全部収録することができたが、その特徴はつぎのような点にある。

鹿鳴館時代のキリスト教発展に井上円了が論戦を張って抗したのは、仏教の擁護と革新を願っていたからであ

るが、その論拠は仏教の進化論による再検討であり、科学的な進化論に堪えうる仏教と堪ええないキリスト教という論法であった。当時の思想界の激変には、戦後の民主化時代よりも激しいものがあつた。徳川封建権力を倒して天皇制を樹立するまでに、国学という復古思想しがなく、また資本主義育成の支えになる思想や社会的経済的地盤もないままに、政府の政治的対策が強行されたのであるから、井上円了の生きた時代は、激変の背後にある変化しないものを求め、現象の変化に迷わないイデオロギーとして「祭政一致の天皇制」―「国家神道」が日本人に浸透していったのに対して、井上円了は仏教の真如にそれを求めた。神道、天皇、教育勅語などは、井上円了にとっては歴史的事実として認めるし、政治的に国家に必要なものであつたが、「宇宙主義」の立場からみれば、変化してゆく現象形態の一つであつた。また「愚夫愚婦の宗教」とよばれて軽蔑の対象となつていた一向宗の真宗の名をあげて「余が所謂信仰」と井上円了は言いきつてゐるから、学者としての単なる科学的論理に基づく発言でもなく、仏教への求道的な姿勢がみられる。井上円了を知るにはどうしても仏教を勉強しなければならぬし、また日本の思想を学ぶにも仏教は知らなければならぬと考える。その意味で第二期の刊行は大きい意義があると考へてゐる。

編集にあつては、文学部印度哲学科の金岡秀友、菅沼晃、田村晃祐、河村孝照、清水乞、森章司、里道徳雄、以上の先生方の全面的協力を得ることができた。現代表記は三浦節夫氏に依頼したが、実に多くの困難な問題があつたことは第七巻の「編集後記」のとおりである。

最後に紙面をかりて、この本の編集、出版関係者に心からの敬意と謝意を表明させていただきたい。

(高木宏夫記)